

## 社会生活を豊かにする「問い」の創造と探求する力もつ生徒

— 中学3年「年金制度を事例とした社会保障制度のしくみ」の実践から —

### 1 単元のねらい

なぜすべての経済活動を市場の働きだけに任せておくことができないのか、国民生活と福祉の向上を図るために、国や地方公共団体の役割、財政の役割、租税の意義を理解し、少子高齢社会の特色を踏まえながら、これからの福祉社会の目指すべき方向を考えることができる。

### 2 授業の構想

#### (1) 子どものとらえについて

公民的分野の導入では、現代社会の特色という単元を学習した。そこでは、グローバル社会、少子高齢社会、情報社会の3つの社会の特色を取り上げた。生徒は、少子高齢社会の問題の1つとして、「人口減少を考えると、財源的に現行年金制度は破綻していないのか」、「自分たちが保険料を支払っても、自分たちが公的年金もらえる気がしない」という不安をもっていた。生徒たちは、将来への年金制度へ不安を高めていた。また、生活保護制度に見られる社会保障制度の矛盾に気付き始めていた。だからこそ社会を見直し、自分たちの生活を向上させていこうとする姿が見えた。さらに生活保護を受けている国民が贅沢な生活をしている報道に憤慨し、本当に事実なのかという確かめたい意欲も高かった。ただ、追求を高めるための知識に偏りがあることも明らかになった。

また、2014年4月に消費税は5%から8%へ引き上げられた。社会保障制度の一層の充実を図るための引き上げは、生徒の日常生活にダイレクトに影響している。国や地方公共団体は、21世紀の福祉社会の目指す方向性を模索している。だからこそ、将来を見据えた自分たちの問題として意識は極めて高い。そして、グローバル化や少子高齢化の進むなか、持続可能な社会保障制度を確立しようとしている社会であることに気付く姿を期待したい。さらに、本題材の学習が自分のくらしや生き方の見識を広げるものであって欲しいと願い授業を構想した。

#### (2) 本単元の内容と社会科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて

私たちは「追求する姿」を次のように考えた（教科構想参照）。それは、創り出した「問い」を解決する活動に取り組む姿である。「21世紀の持続可能な公的年金制度はどのようなものか。また、国（地方公共団体）や私たちは、どのようにかかわっているか？」という「問い」を解決するために、始めにすることは、生徒が「問い」の解を予想することである。

予想：毎年の国債発行高を見ると、現在の年金制度を持続することは難しい。したがって、制度の改革が必要である。そして、国民に負担増を強いる可能性が高いので、しっかりと説明ができる制度が必要である。

本年度の内容に当てはめてみると、上記の予想には意欲をもって追求している活動が顕著に表れていると考える。

次の段階では、予想を裏付ける根拠となる資料等を集める活動になる。

集めた資料

- ① 諸外国の国債発行高
- ② 諸外国の国民の税負担率
- ③ 諸外国の消費税率

- ① より、日本の国債発行高が世界的に見て、多いということがわかる。
- ② より、日本国民に対する税負担は、世界的に見て低いことがわかる。
- ③ より、消費税を導入している国々の中で、日本は消費税が低いことがわかる。

以上より、予想した「毎年の国債発行高を見ると、現在の年金制度を持続することは難しい。したがって、制度の改革が必要である。そして、国民に負担増を強いる可能性が高いので、しっかりと説明ができる制度が必要である」は解の1つと考える。

さらに、グループや自分の考えがまとまったら、学級で発表し、最善解かどうか他者の意見を参考にし、みんなで検討する。検討する際、「公正と効率」「時間軸と場所軸」「社会的背景の明確化」の視点で再考する。つまり、「国民の税率負担は低いので、所得税や法人税を増やすより、消費税を増やした方がよい（公正）。しかし、所得の高低もあるので、やはり多くのお金を持っている人から多く税を払ってもら方がよい（効率）」という視点で、もう一度予想した解を検討することである。また、「いつごろ、累進課税は導入されたか？なぜ、導入されたのか？（時間軸）。それから、ヨーロッパ特に北欧の国々の社会保障と消費税の関係はどうなっているのか（場所軸）。」これらを踏まえて、予想した解が当てはまるかも検討したい。

この検討し、再考する活動では、新たな疑問をもち、さらなる追求のきっかけになることが大切と考える。そこで以下のような探求の手立てを考えながら研究を進めている。そして、何が要因になって「学び続ける」のか明確化していくことが、これからの研究を行う上での課題と考えている。しかしながら、このような単元構成をすることによって、問いを創造し、探求する力を伸ばすことができる。そして、このような活動を取り入れることによって、学び続ける力を身に付けることができ、追求、探究するようになることが示唆された。探究の手立てとしては、次のようなことが挙げられる。

- 生徒が自分のくらしや生き方につながっていると感じる単元を貫く課題を設定する。
- 生徒が「問い」を創造し続けるよう、課題解決の過程でも常に社会的事象に向き合えるよう体験を取り入れたり、資料の工夫をする。
- 単元の節目に、社会的事象と自分とのかかわりに気づき、深めるためのふりかえりを実施し、生徒の見取りをする。

### (3) 本単元の内容における問いをもち追究する姿を育成するための具体的な手立て等について

本単元の課題を「21世紀に持続可能な公的年金制度とは、どのようなものか。国（地方公共団体）や私たちはどのようにかかわっていくのか」と設定した。現行の公的年金制度を通して、「社会保障の充実」「国や地方公共団体の役割」「財源の確保と配分からの財政の役割」「租税の意義と役割」について考える。そして、少子高齢社会における社会保障の財源の確保と配分の問題の解決策について、消費税の負担者として自分をとらえ、考えたことをまとめたり、他者に説明したりする活動を取り入れる。さらに、グループで追求した成果を発表し、学級全体で「効率と公正」「時間軸と場所軸」「社会的背景」の視点で再考し、本当に最善解か検討することで、何が解決でき、何が解決できないのか、次への疑問が生まれることを期待する。そのために、自作資料集と既成資料集を活用することで根拠ある議論になるよう工夫したい。

#### 【生徒が問いをもち続けるための教師の支援】

- ① 自分のくらしや生き方につながる単元の課題と社会的事象に向かい合える資料  
生徒たちのくらしや生き方の見識が広がり深まる学習になるように課題や資料を設定する。
- ② 生徒の固定概念を覆す資料の提示と知的好奇心をゆさぶる工夫

一人一人が問いをもち続けるためには、いかに生徒の固定概念をくつがえすかが重要である。もしくは生徒の考えの狭さや浅さをゆさぶることにより、さらに問いをもつことが大切である。

### ③ 評価（ふりかえり）のできる単元構想図を設定すること

「単元構想図」を利用し、単元構想や授業構想をしっかりと計画した上で、授業中の活動で行う評価を明確にする（図1）。

### 国民生活と福祉の単元構想図（中三）

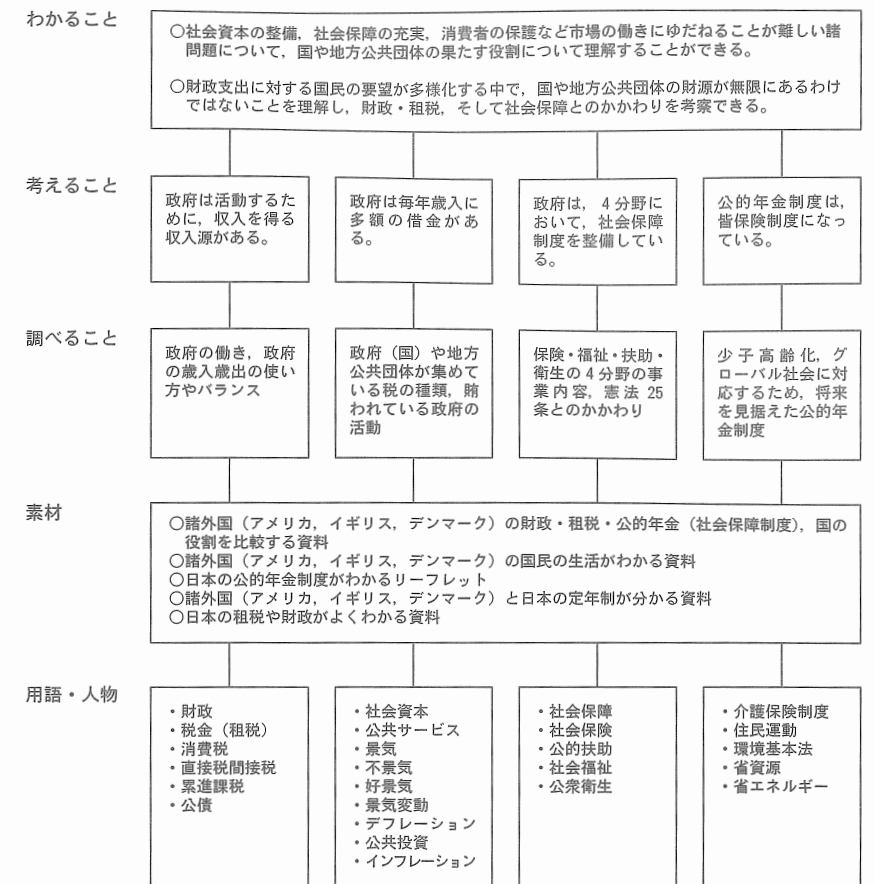


図1 単元構想図

### 3 展開計画（全7時間）

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身近な教材との出会い(資料)から疑問を創り出す。</li> <li>・単元の課題を知り、疑問から問いを絞り込む。</li> <li>・問いの解を求めて、資料集から証拠集めをする。</li> <li>・問いの解を追求し、視点にそって再考する。</li> </ul>	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保険証など身近な資料の提示、日本と諸外国の税、財、国の役割など社会保障制度（公的年金制度）にかかわる資料を比較し、各自が疑問を出す。</li> <li>(例) どうして、日本は世界より債務が多いのか(疑)。</li> </ul>
		2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いくつかの疑問の焦点化をし、単元の課題を知り、単元の課題を解く問いをグループで絞り込む。</li> <li>(例) 日本は、どうやって債務を返していくのか(疑)。</li> </ul>
		3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループで絞り込んだ問いの正解を予想する。そして、資料集から証拠集めをする。資料の読み取りの質疑応答をする。</li> <li>(例) 日本の社会保障の財源問題は、どのように解決できるのか(問)。</li> </ul>
		4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループごとに、絞り込んだ問いの証拠集めをし、問いを解決する。</li> </ul>
		5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問いの解を視点ごとに検討しながら、単元の課題の解をまとめる。</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本単元の課題の解を発表し、探求する。</li> <li>・松江年金事務所との質疑応答をする。</li> </ul>	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単元の課題の解を発表し、視点にそって探求しながら、学級全体で根拠を明らかにして「何が解決でき、何が解決できないのか」などを再考し、最善解を創る。</li> <li>(例) なぜ、今、解決できないのだろうか(疑)。</li> </ul>
		7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少子高齢社会における公的年金制度とその財源確保の問題をどのように解決すればいいのか考えよう。</li> </ul>

#### 4 授業の実際

以下生徒Aのノートを使って検証していきたい。

##### (1) 問いをもつ場面の構想 (1・2時間目)

社会保障制度に関係した諸外国と日本の比較ができる資料を用意した。そして、自由な発想のもと、一人一人が疑問を考えた。右のノートの下に疑問や感想が書いてある(図2)。

- デンマークに住みたい。
- なんで、これで成り立っているのか。
- 日本の債務はなぜ減らないのか。
- 消費税を日用品と高額なもので分けている国があるそうです。なぜ、日本はしないのか。
- 社会保障は多いのに、税金は少ないのは何故?

まずは疑問をはっきりさせる。疑問の整理をしている(図3)。

- デンマークは、なぜ成り立つのか。

「まず、仕事に関して、少ない労働時間でいると、収入の割に税の徴収が多くなると、払いきれなかったり、生活に崩れが起きたりするのではないのでしょうか。」と整理している。

そして、疑問から問いを創るために、グループで話し合いをしている。まず、「なぜ、疑問にしたのか」をグループ内で発表する。そして、グループで、単元を貫く課題である「21世紀の持続可能な公的年金制度とは、どのようなきまりか?そして、国(地方公共団体)や私たちはどのように関わってくるのか?」を解決するのに必要な疑問かを検討した。その結果、次の3つが疑問から問いという形で新たに創られた。本校園の社会科では、問いは単元や小単元を貫く課題を解く疑問と定義をしている。

<問い>

- Q1 デンマークのしくみ

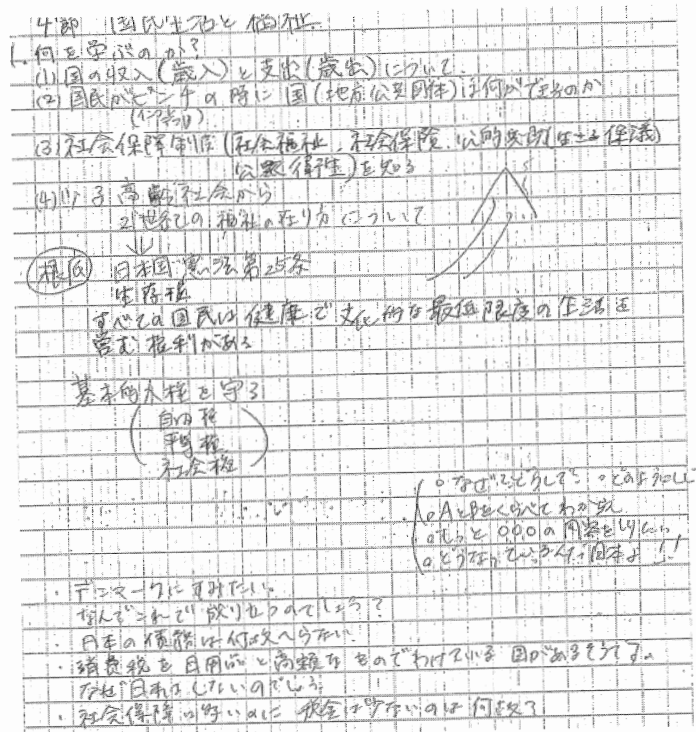


図2 生徒Aの疑問

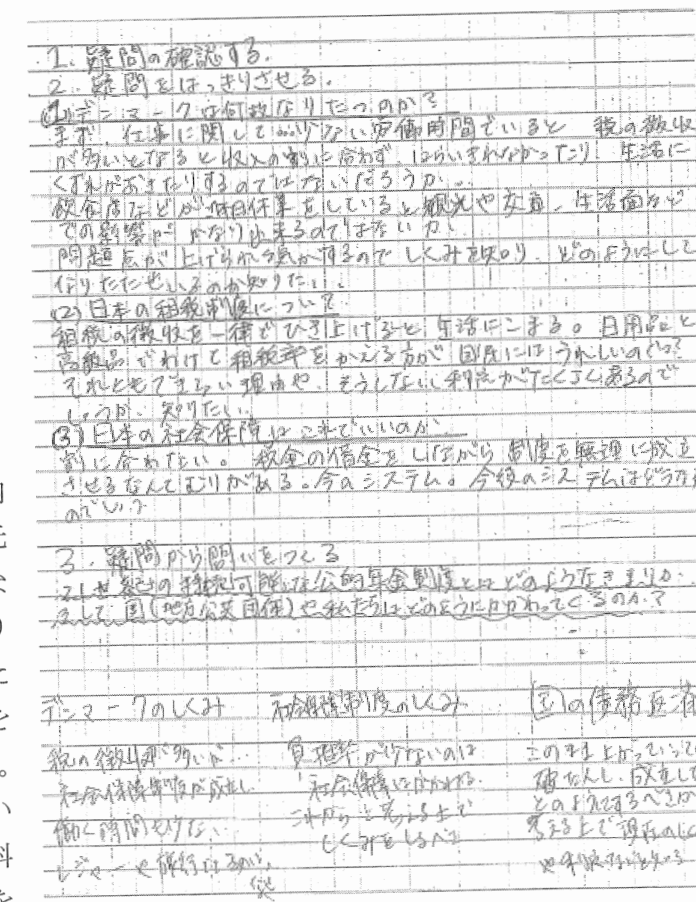


図3 生徒Aの問いの創造

日本と比べ、税の徴収が多い、働く時間が少ない。レジャーや旅行をよくしている。どのような社会保障が成立しているか。

##### Q2 社会保障制度のしくみ

日本の税負担が軽いのは、社会保障に関わってきているはずである。だから、日本の社会保障のしくみを調べる。

##### Q3 国の債務返済方法

このまま上がっていくと、破たんしてしまう。どのようにすべきかを考えるために、現在の返済方法を調べる。

次に追求する段階になる。グループでQ1~Q3の解を予想する。そして、調べるようにする。調べる際には、資料を根拠にして解を求めるようにした(図4)。

##### (2) 問いをもち追究する姿の育成 (3~6時間目)

Q1の解 デンマークは、消費税20%というかなりの税徴収である。彼らの収入は、日本と同じくらいだが、社会保障制度がかなり充実しているため、教育や医療、年金に対しての費用を国が負担しているため、その分残ったお金を休暇に活用できる(収入は特別に多くない)。

Q2・Q3についても、グループで資料を根拠にして解を創り出している。

そして、単元を貫く課題の解をグループで話し合い求めている。

徳政令を出し、1度国債を踏み倒すことを考えている。国債のほとんどは自国である。だから、1度ゼロにして、経済復興を考えようかと解を出している。また、国債はそのままいく。高齢者にヘルスプレーションをしたり、定年引き上げをして、さらに増税をして社会保障制度とつり合いが取れるようにサービスの安定した向上を図る。

さらに単元を貫く課題を解く過程で、公正と効率の視点を入れて探求している。一度グループで考えた解をさらに探求するために、今回は公正と効率の視点を入れている(図5)。

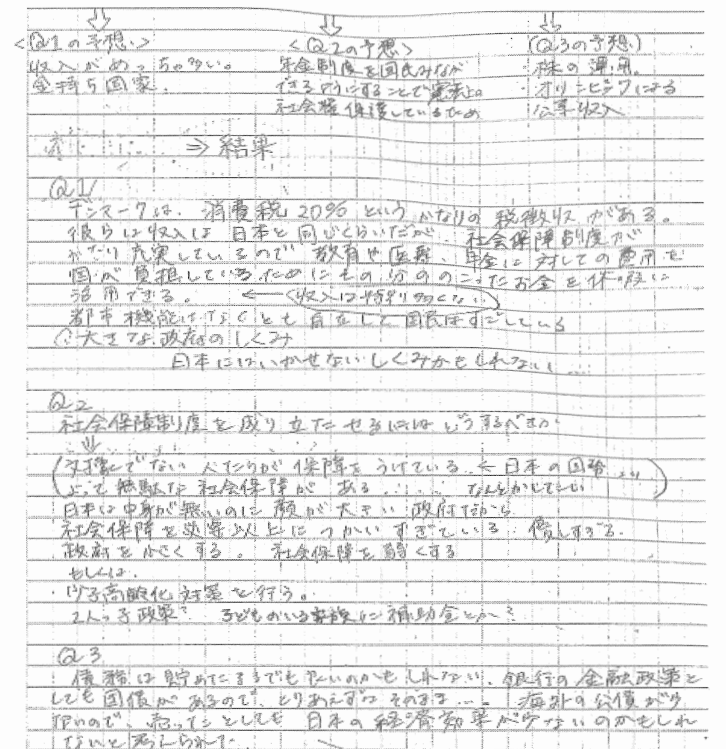


図4 生徒Aの追求の場面

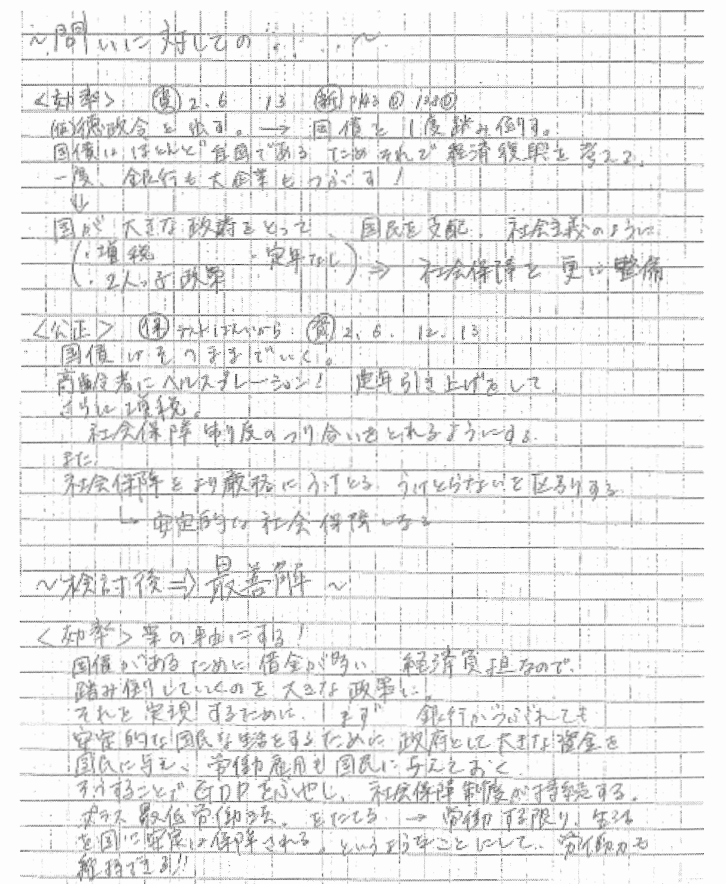


図5 生徒Aの探究場面

そして、右のマトリックス表を使って、事例のように、黒板にグループの解を書き、マトリックス表のどこになるのか、全体で検討会を行った。マトリックス表の★印に迫るためには、どのようにグループの解を修正し、最善解に近づけていけばよいか、他のグループの意見を聞くような場を設定した(図6)。

探求の最善解は次のようである。

国債があるために借金が多いし、経済負担が大きいので踏み倒す政策を考える。実現するために、まず銀行が倒産しても、安定した国民生活ができるように政府が大きな資金を準備する。

また国民に労働雇用を準備する。政府が最低労働法を作り、働いている国民には、安定した生活を保障するようにする。

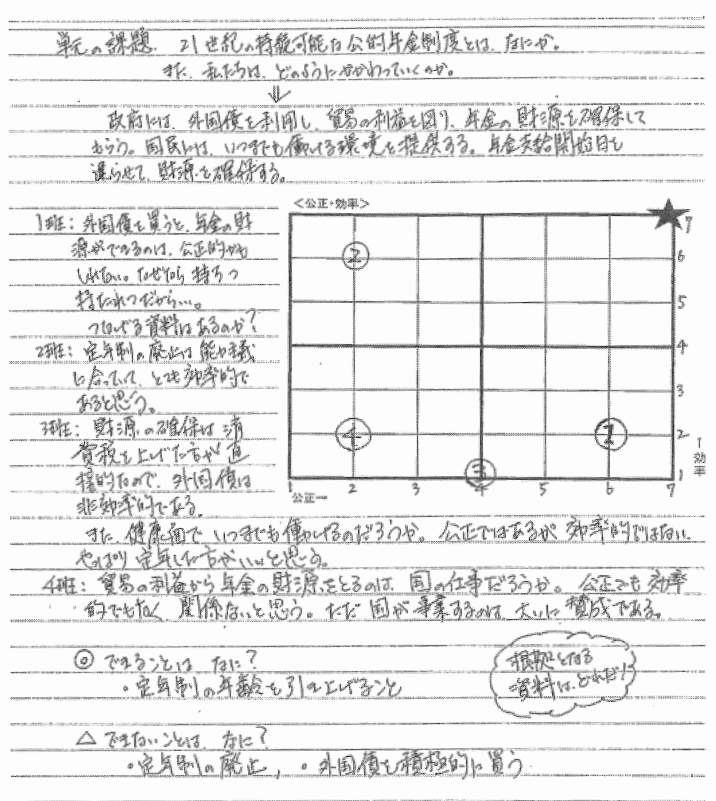


図6 マトリックス表

### 5. おわりに (7時間目)

成果については、社会科部の「問い」の定義ができた。

また、「問い」の創造から「最善解」を求める追求・探究の学習スタイルの1つが完成できたことである。さらには生活と結びつけて「問い」を見出すことができた。そして、グループでの話し合いに「効率・公正」の視点を入れることやマトリックス表を使って自分の考えを可視化できたことなどがあげられる。

参加者から「年金をやめる」「定年を上げる」「国債を踏み倒す」など、やや乱暴な意見があり大丈夫かという指摘があった。単元の最後には、松江年金事務所との対談とセミナーを設定した。そこで、生徒のさまざまな意見を聞いてもらった。その中で世論や資金など、様々な問題があり、定年を60歳から65歳に引き上げる政策も、なかなか前に進まない現状について、わかりやすい説明を聞いた。生徒たちは、さまざま立場から社会保障制度について学習を深めることができた。生徒Bは、「セミナーを受けて、非常に年金についての理解が深まりました。授業の中でやっていた解釈とか違うところも多く、自分の考え方が浅かったんだなと思いました」と自己評価できた。

本授業のスタイルは、疑問からスタートし、単元を貫く課題を解く問いを創り、単元を貫く課題をグループで話し合い、解を出した。そして、さらに効率・公正のマトリックス表を工夫し、学級全体で各グループの解を再検討し、グループに返り、再考し、最善解を導き出す学習活動であった。これからの社会科部の研究は、何が要因になって「学び続ける」のか明確化していくことが、次のステップと考え、真摯に研究に取り組んでいこうと考えている。(文責 岡田 昭彦)